

鵜 沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 5 6 号

1 9 9 0 年 1 1 月 1 3 日

鵜沼公民館祭「馬頭観世音と馬のルーツを
たづねて」写真展（10月27・28日）

資料提供 塩沢務・持田眞男・吉田興一

鵜沼の光と影その2・3 吉田興一

鵜 沼 を 語 る 会

馬の進化をさぐる

馬の祖先は今から5,400 万年程前に地球上に現われました。体はキツネ程の大きさでした。彼等は湿地帯のジャングルで生活をしていました。中新世からは、柔らかい木の葉を食べていたものから、草を食べるものが現われてきました。おそらく湿地帯はしだいに乾燥した森林地帯に移り変わったためです。森林地帯の一部は大草原や砂漠となりました。地球上では、大山脈を造り、火山の噴出が起きるなど大変動の中で、馬の先祖は、体を大きくすることと、速く走る方向に進化を続けて。この厳しい自然界法則に従って最後に生き残ってきました。

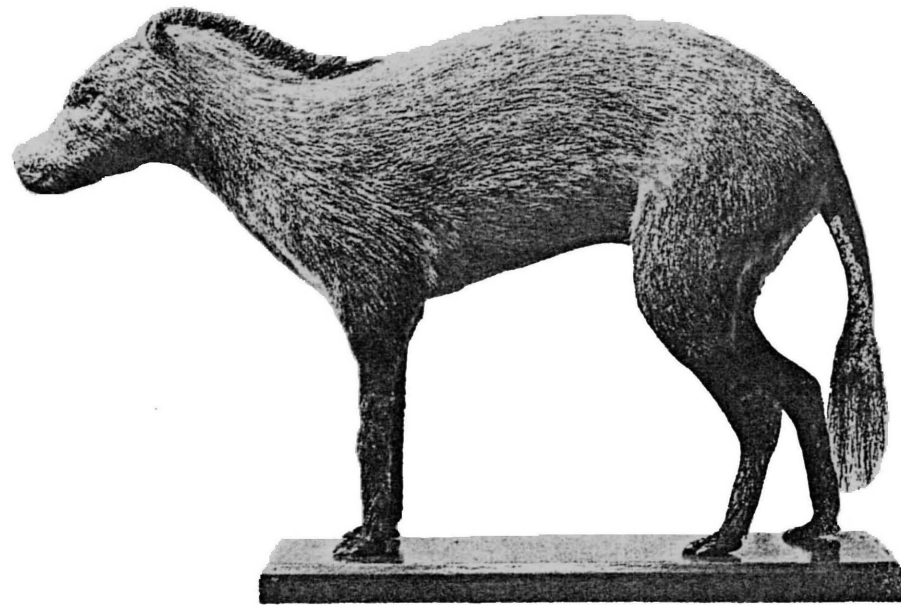
人類が地球上を支配し始めると、家畜化された仲間のみ栄え、野生のものは次々と人類によって亡ぼされ、家畜化された仲間も機械化の発明によって滅ぼされ、全滅寸前の状態いです。

(馬の博物館資料より)

古代馬の仲間の復元模型

当展示室の復元模型（ヒラコテリウム、メソヒップス、ブリオヒップスは、アメリカ、ニューヨーク自然史博物館から提供を受けたそれぞれの化石の全体骨格復元模型から成形復元し、さらにスミソニアン協会発行の始新世、中新世初期、鮮世初期の各時代の馬の想像復元図を参考に、外ほう毛色等を表現したものです

馬の先祖
三匹の馬の足爪ご注目下さい



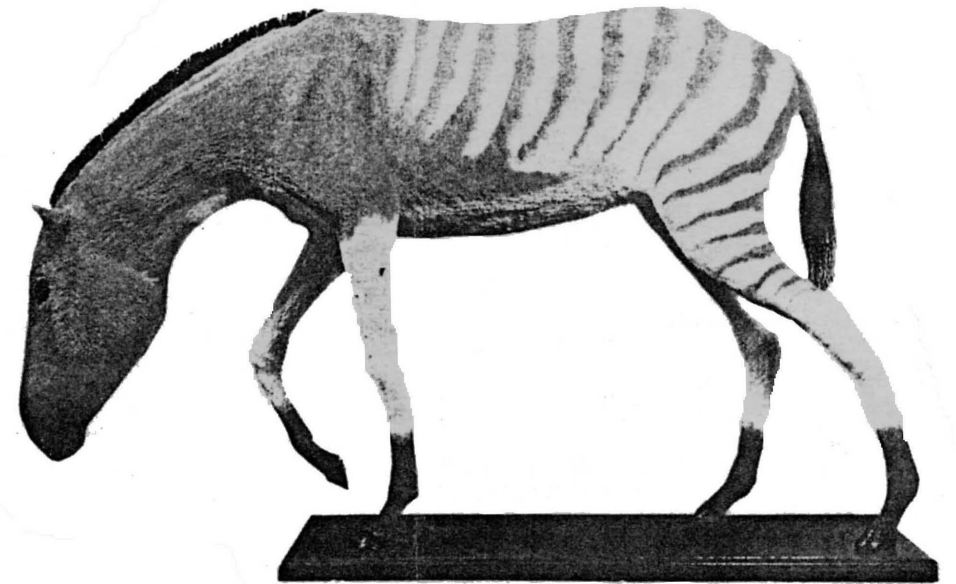
ヒラコテリウム

始新世の間の馬の仲間は、柔らかい地面を歩くのに適し、敏捷で草の茂み等にかくれて外敵から身を守り、柔らかい木の葉や水草等を食べていたと思われます。



メソヒップス

漸新世から中新世の間の馬の仲間は、森林内の生活に移り、歯は柔らかい木の葉等を食べやすいように表面が変化し、森林内での生活に適応出来るように進化してきました。



ブリオヒップス

鮮新世から更新世にかけての馬の仲間は、「メリキップス」から歯質に大きな変化が起き、硬い草でも十分にすりつぶして食べられるようになり、また視界も広がって、外敵の発見が容易となり、完全に草原の動物と化してゆきました。

神奈川県競馬沿革誌略（帝国馬匹協会）

古来神社仏閣境内或は部落共有馬場は県内数十ヶ所に散在し、祭典競馬、旗競馬盛んに行れたるも、乗馬税及關令に則る競馬規定に依り漸次衰頹に傾きたり。

偶々大正12年9月に突発せる所謂関東大震災は、横浜市全地区を焼土と貸し、県内全土地区亦惨憺たる大破を被り県を挙げて悲慘の極に陥れ徒に飛ぶ流言は何れも悲觀を強化するのみにして、其間には教育もなく産業もなく前途は刻々奈落の深淵を辿らんとするものあり、

時の長官は此の情勢に鑑み復旧復興の目標とせる事業の調査を命じ、特に人心の復興に意を用ひしめたる柄、畜産事業に地方競馬の開催が有効なることを認め、即ち競馬規則を発令し、各郡市一ヶ所を標準とし畜産組合をして経営せしめ、同競馬には優勝馬投票を行はしむることとせり。

斯くて本規則に依り左記八競馬場の親切を実原し、本事業は頗る大衆の人氣を集め回を重ねる、毎に累進加算的成績を示し其の驚異的盛況は為めに優良馬の充実となり、延ひては馬以外の畜産の発達を招き畜産組合の基礎を確立し本県畜産業をして今日あらしめたるは真に本競馬の功績と謂ふべきなり。

中郡秦野競馬場（大正13年新設）平塚市に移転す（大正15年）。

足柄上郡松田競馬場（大正14年新設）。

足柄下郡小田原競馬場（大正14年新設）国府津移転更に再び小田原に移転。

愛甲郡厚木競馬場（大正14年新設）。

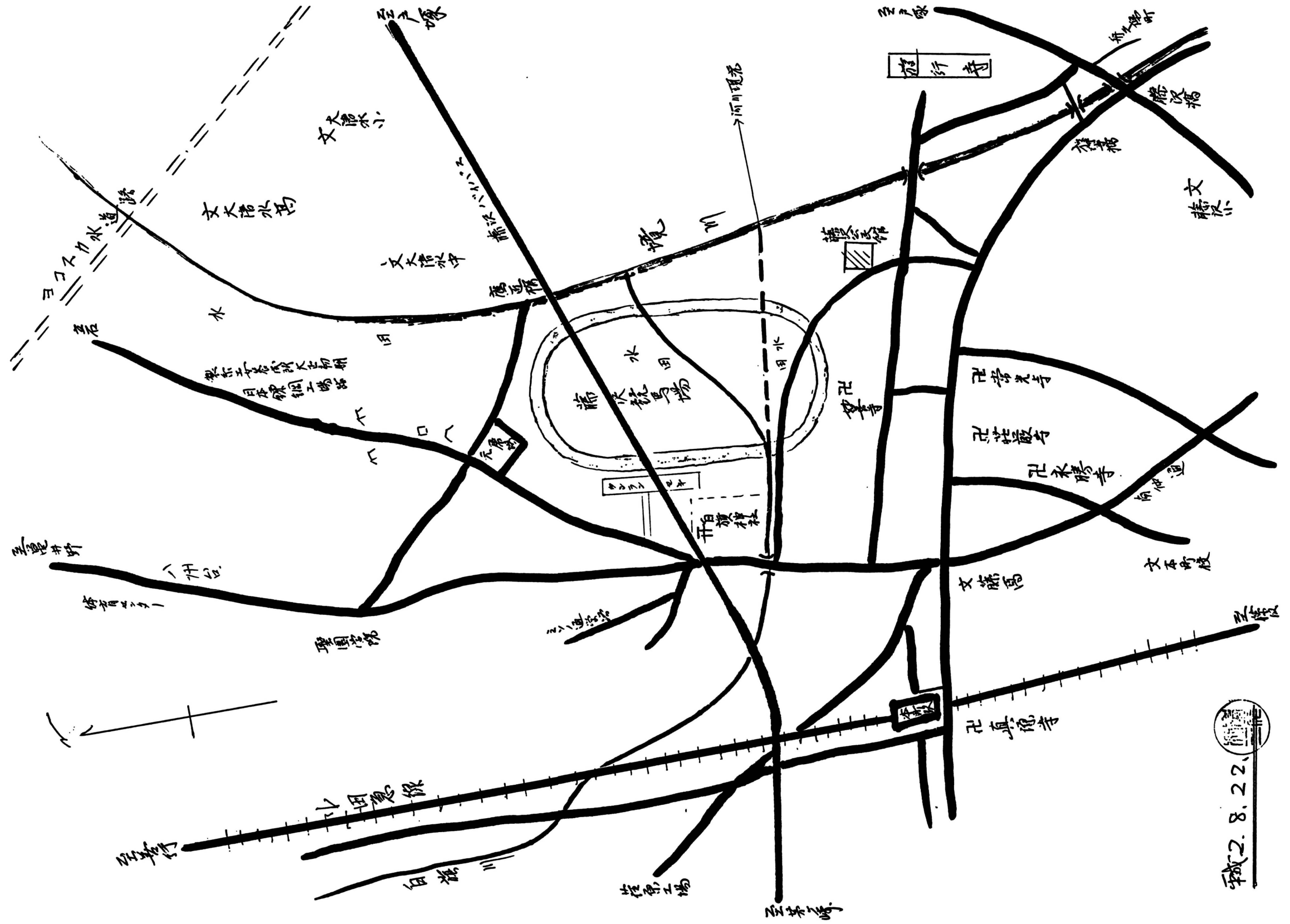
高座郡橋本競馬場（大正 1 4 年新設）藤沢町に移転す（大正 1 5 年）

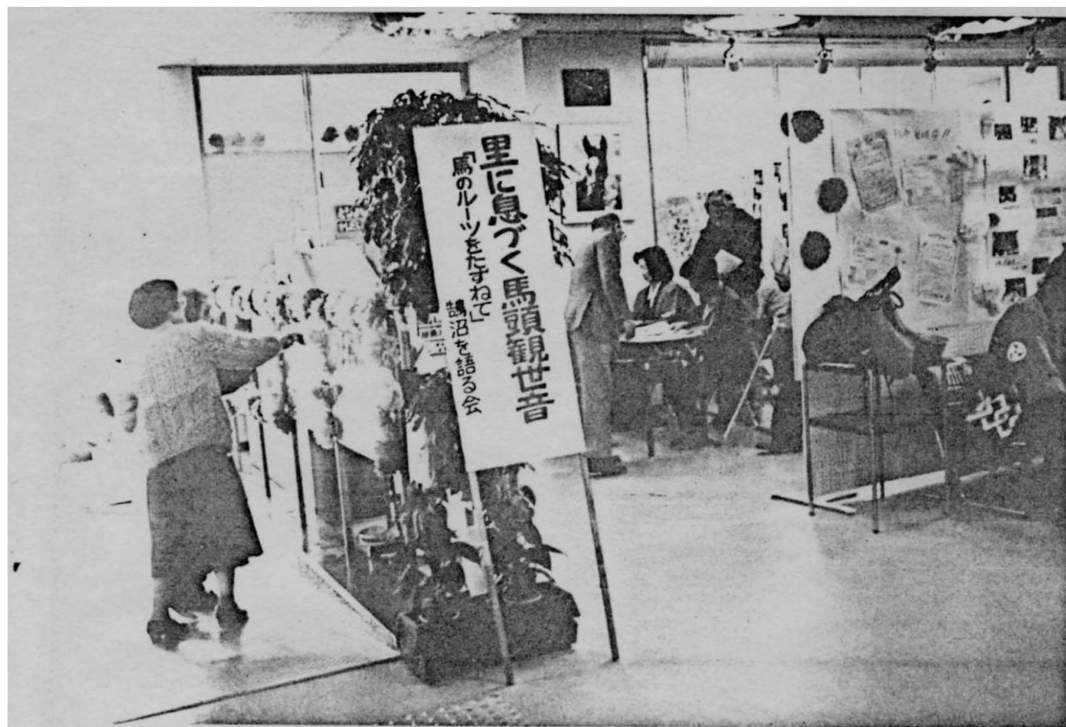
鎌倉郡大船競馬場（大正 1 3 年新設）。

三横横須賀競馬場（大正 1 4 年新設）初め大津旧練兵場后公郷町に移転す。

川崎市鶴見競馬場（大正 1 4 年新設）中原町に移転更に生田村に移転而して昭和 2 年地方競馬規則発布全 5 年全規則に依り県内へ競馬場を 2 ヶ所に制限せられたる為め本畜産組合联合会は始め 4 ヶ所に協定して昭和 6 年県下平塚・藤沢・小田原・大船に於て順次年 4 回を開催し更に本会は資金を準備して新競馬場の建設を計画し昭和 7 年 1 月 1 5 日川崎市に全 8 年 5 月 1 1 日戸塚町に現在の競馬場を新設し今日に至る。

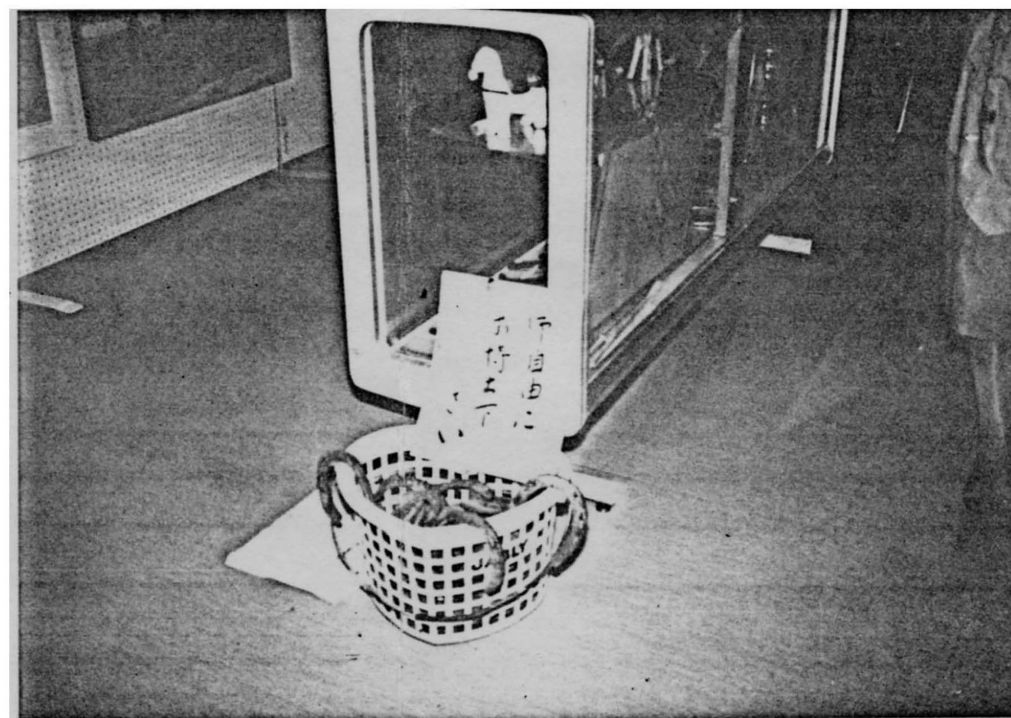
以上

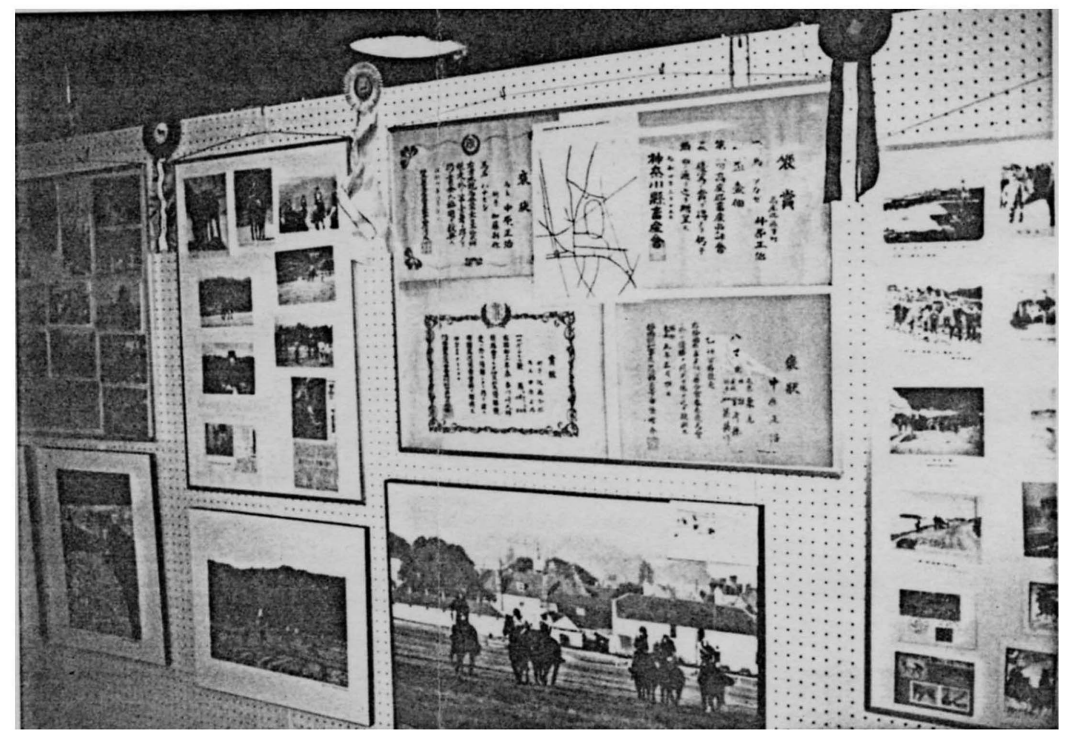
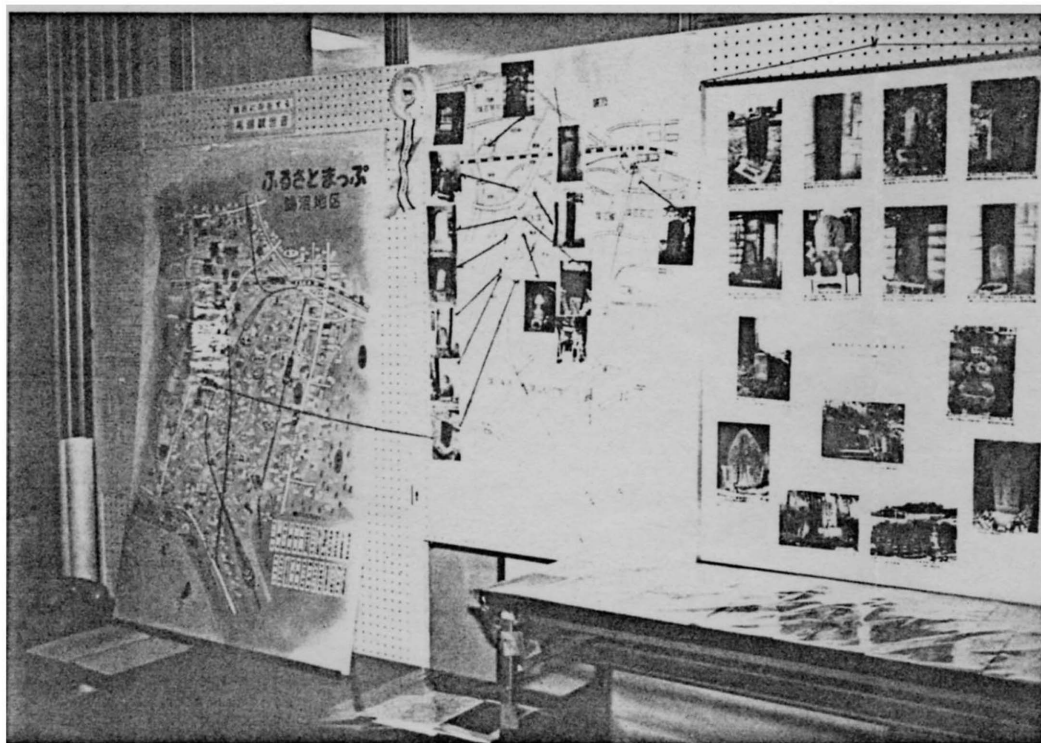




「里に息づく馬頭観音と

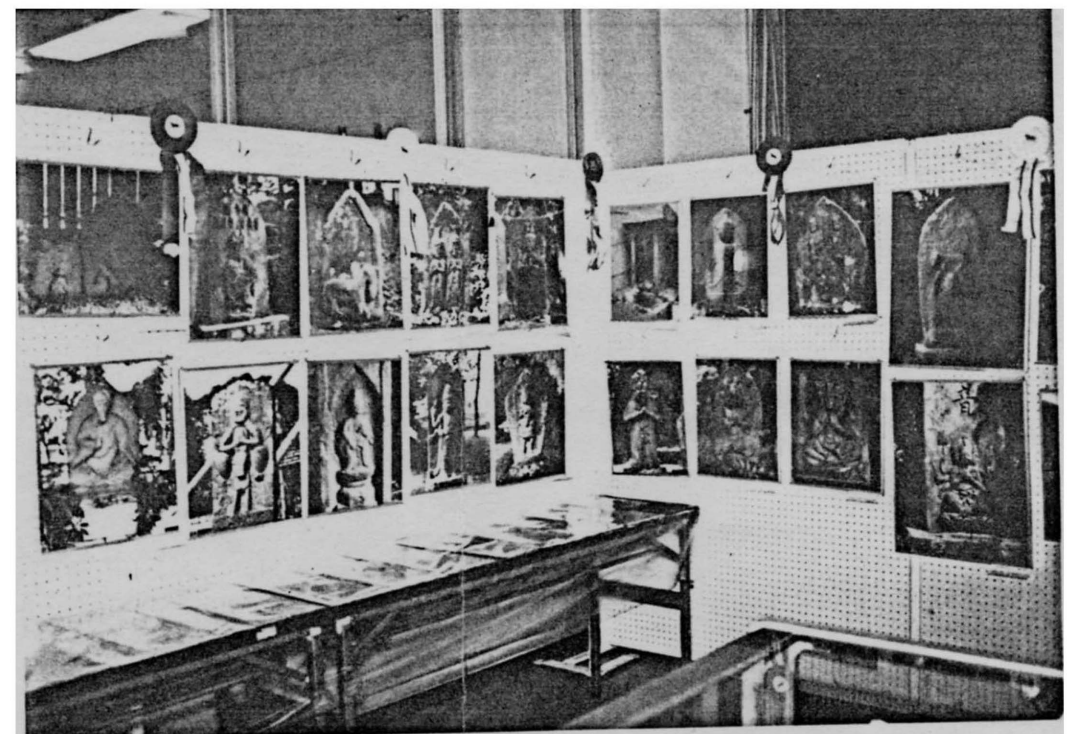
馬のルーツをたずねて」





「里に息づく馬頭観音と

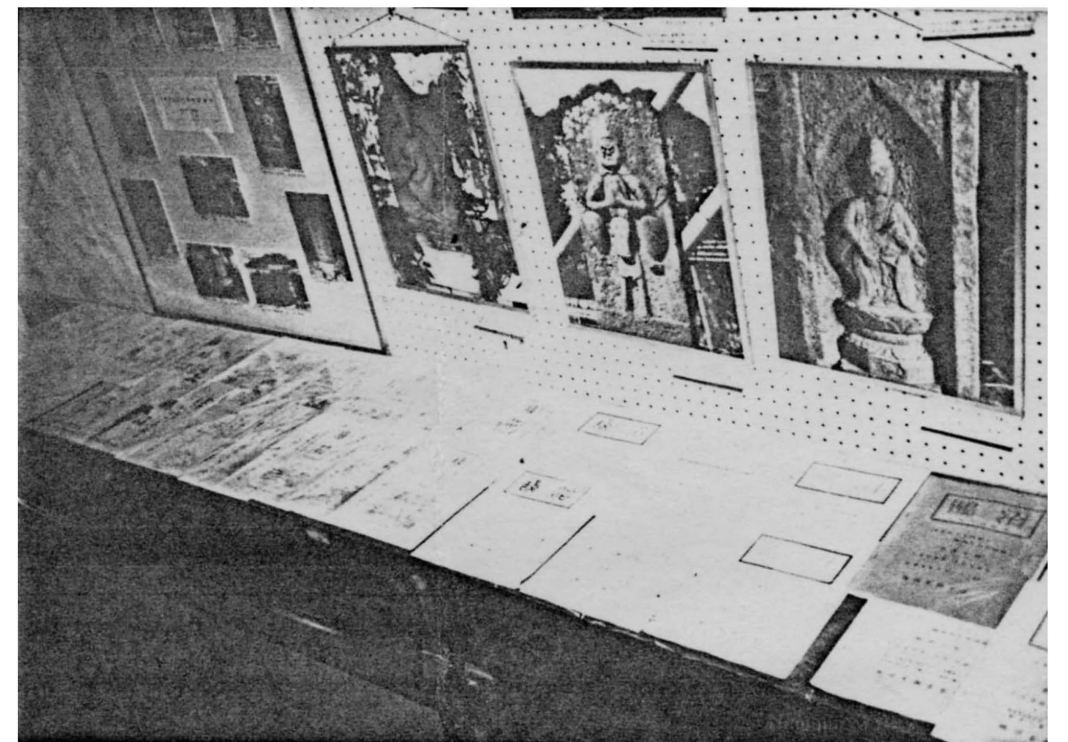
馬のルーツをたずねて」

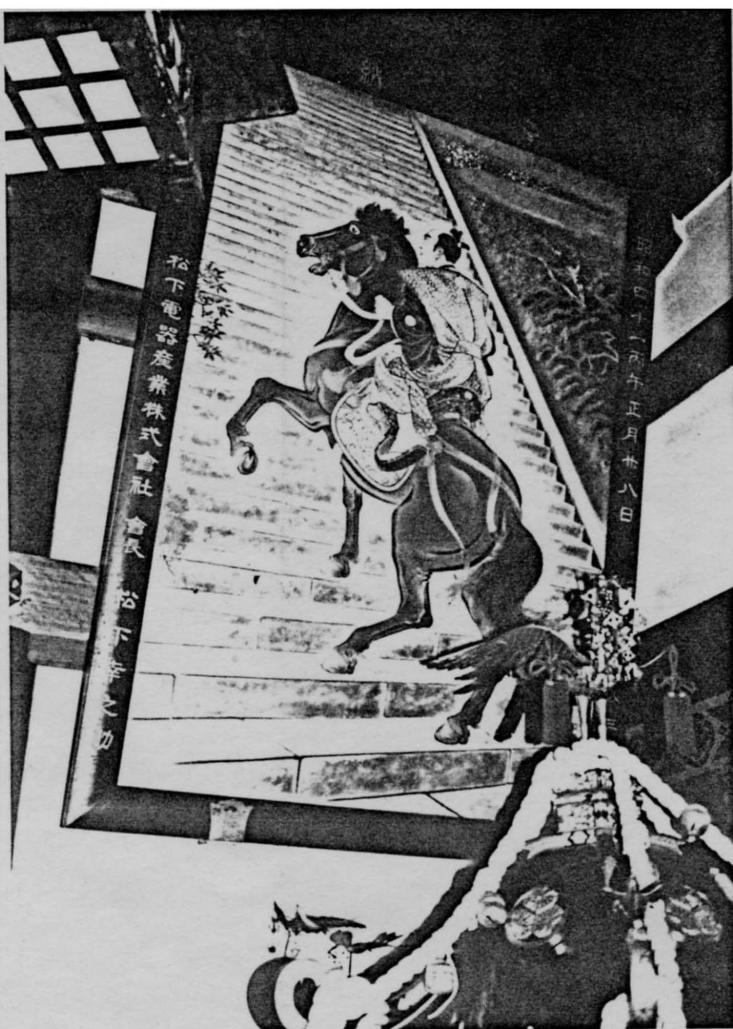




「里に息づく馬頭観音と

馬のルーツをたずねて」





「里に息づく馬頭観音と
馬のルーツをたずねて」



鵠沼地区馬頭観音



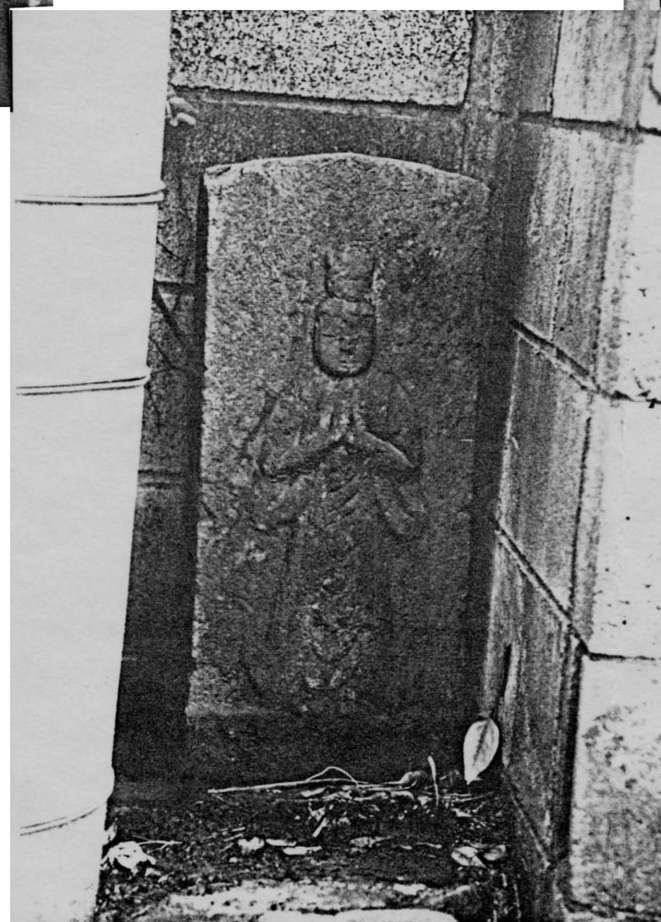
本鵠沼2-6-13 (鵠沼農協裏)



本鵠沼3-16-13 (本真寺脇踏切内)

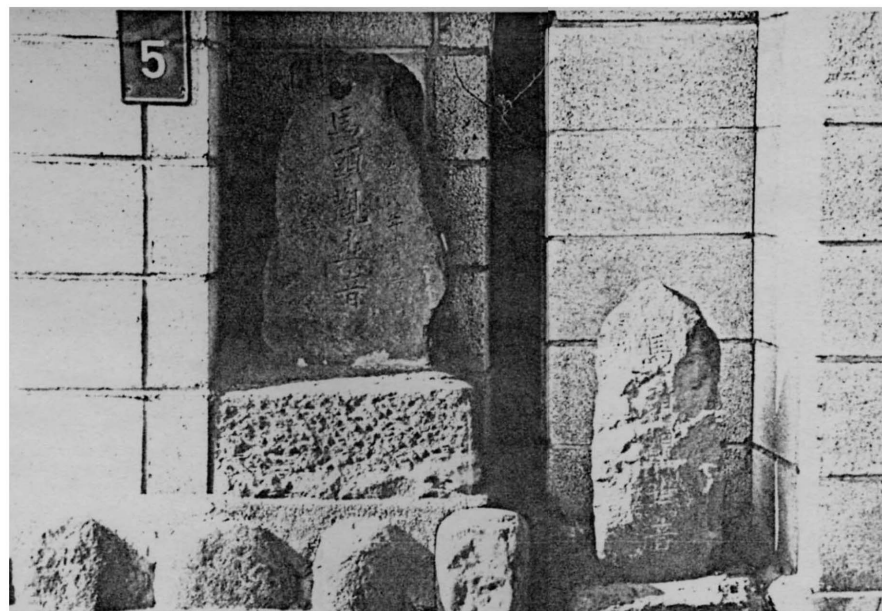
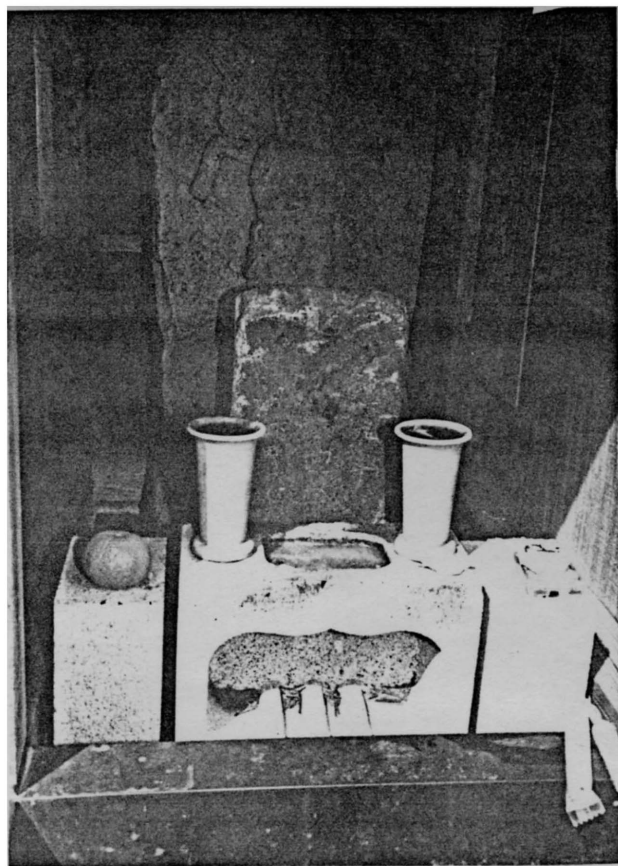


本鵠沼3-3-32 (林家門前向)



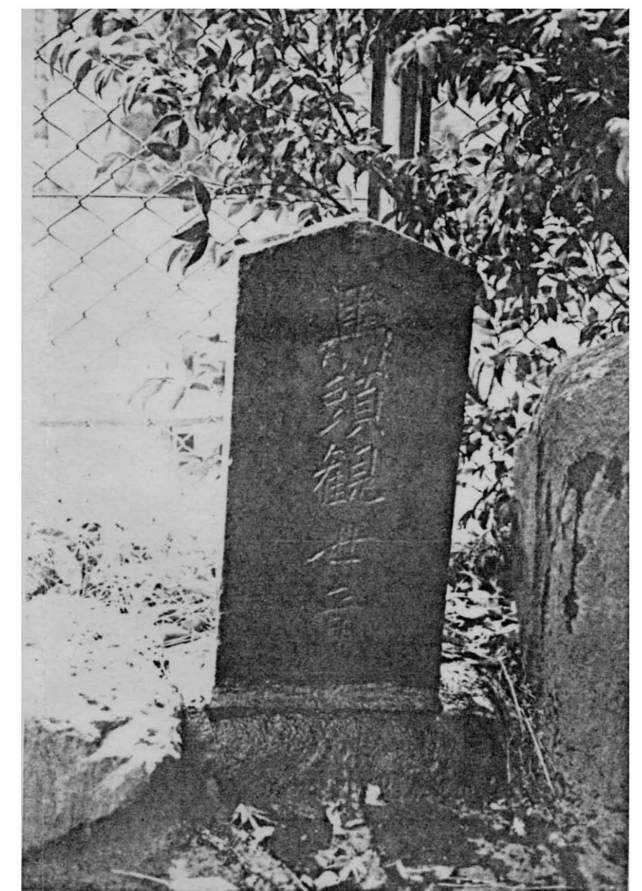
本鵠沼2-6-13 (鵠沼農協裏)

本鵠沼 2-8-16



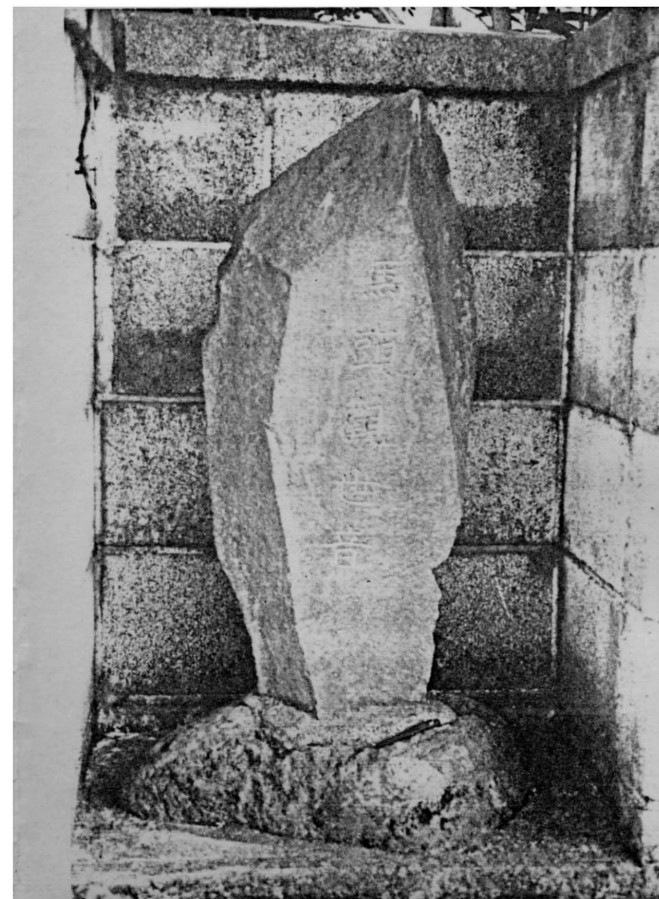
鵠沼海岸 7-5-17

鵠沼地区馬頭観音



石上通り 砥上公園内

本鵠沼 5-10-21 (刈田稲荷)



鵠沼神明 2-4-20 (壁面内)

NO	観音名の刻印	その他の文字（主なもの）	高さ	形態	所 在 地
1	馬頭観世音	寛政11末年（1799） 9月26日	60.0cm	石塔	本鵜沼3-16-13 堀川（本真寺脇）
2	馬頭観世音	文化13年子壬月4日（1816）	61.0cm	像	本鵜沼2-6-13 大東 藤沢農協鵜沼支店裏
3	馬頭観世音	大正12年2月4日（1923）	47.0cm	石塔	
4	馬頭観世音	天保7年申7月吉日（1836） 奉造「林家」	54.0cm	像	本鵜沼3-3-32 林定夫氏門前向側
5	馬頭観世音	万延元年3月18日（1860） 加藤蔭十郎、宮沢龍治郎	53.0cm	石塔	石上通り 砥上公園内
6	馬頭観世音	明治28年10月吉日（1895）	57.0cm	石塔	鵜沼海岸 7-5-17 堀川
7	馬頭観世音	大正14年4月20日（1925）	55.0cm	石塔	N06 とN07 隣接 鵜沼海岸 7-5-18 堀川
8	馬頭観世音	明治29年（1896） 11月24日	35.0cm	像 祠有	本鵜沼2-8-16 中東、二股道の角
9	馬頭観世音	大正8年4月18日（1919） 小林氏	80.0cm	石塔	鵜沼神明2-4-20 宮の前、駐車場角
10	馬頭観世音菩薩	昭和5年9月建（1930） 施主 山口定吉	32.0cm	石塔	本鵜沼5-10-21 荻田稲荷祠脇
11	馬頭観世音	大正10年12月13日（1921）	49.0cm	石塔	本鵜沼2-19-10 榛葉氏邸内
12	馬頭観世音	寛政9年（1797） 己十年（不詳）	71.0cm	像 祠有	本鵜沼2-15-24 森井氏邸堀外の角

〔注〕 1. 上記の所在地に疑問のある方、まだ外にある、とご存じの方はお申し出下さい。
2. 上記のことについて、まだお聞きになりたい方は遠慮なくお申し越し下さい。

馬頭観世音とは

現在この世の中で、我々の日常で親しまれている仏様は観音様です。大船の観音、高崎の天空に聳えている観音様、そして江戸の昔から庶民に親しまれている浅草の観音様。ひとくちに観音様といっても、十一面観音、千手観音、如意輪観音など是有名で、わが国の仏教尊像のなかで、多くの人に最も親しまれているのは、これらの観音様である。中国で観音菩薩の像が作られるようになったのは、五世紀に入ってからで、釈迦如来、弥勒菩薩阿弥陀如来などは時代によつて流行があるのにひきかえ、観音様は満遍なく盛んにつくられている。日本でも奈良の法隆寺には、夢殿の本尊の「救世観音」がある。聖徳太子が「末世の衆生の悪夢を転ぜしめんとして止利仏師に造顕することを命ぜられた」とする伝承があるそうで一名夢違観音の名がある。そのほか、百済観音、六観音、九面観音をはじめ、金堂の壁画や絵画類にも多くの観音像がある。その中に馬頭観音も入っている。この観音様の特徴は、やさしい顔をした観音様の中で、忿怒相と呼ばれる、激しい怒りの顔をしていることと、頭部が馬になっているか、頭に馬頭を置いていること、この二つである。そして、肌の色が赤色なのである。三面二臂とか四面八臂の像が多いが、かならずしも一定していない。

なぜ、馬頭観音が存在するようになったのか。？馬とどんな関係があるのか。？誰しも不思議に思う。そして、馬頭観音の由来には、ほかの観音様とは違った興味が湧いてくるのである。そこで「目でみる観音菩薩」（田中義恭・星山晋也編著）という写真集から、一部引用させていただいてみよう。それには、「馬頭観音（ハヤグリーヴァ）の名称は、頭に馬頭を戴くところに由来している。馬頭明王、馬頭大王とも呼ばれ、梵名を意識して大力持明王、その形相から忿怒持明王ともいわれる。」と。別の大法輪選書という「観音像の形と物語」によると、「インドの古典の一つである〔リグベータ〕の中に出てくるペード王の物語からきたものともいわれている。そして、仏教にとりいれられ、日本にきて信仰されるようになると、家畜たち、特に馬の守り本尊として信仰されるようになり、観音の他の姿のものとは違った効験をもつ像として拝まれてきたようである。しかも、日本においては、馬は旅行するときの交通手段として、また、武士の乗り物となり、戦場をかけ巡り、幾多の物語に登場してくる。馬頭観音は、ただ馬の除病・息災のためだけでは

なく、乗り手である武士によっても武運と安全とが祈られる傾向にあった。」とある。

鵠沼にある馬頭観音は、立像もあるが、石塔の方が多い。これは長い昔（約200年前）から伝わったものもあり、風雨に晒され、石も風化しやすいものが使われたせいかもしれないが、立像が磨耗して、建て直す際、豊かではない農村にあっては、文字を刻んだ石塔に変えられたのかもしれない。あるいは、観音信仰の変遷があったかもしれない。最も古いもので寛政9年とあるから、1797年にあたり、将軍家斉の時代である。これらに関する土地伝承の調べは、今後の研究課題とも思う。鵠沼の馬頭観音様は、ご覧のとおり素朴で、その数も少なく、芸術的値打ちはないかもしれないが、土に生きる農民の守り神として、長い歳月をひそかに息づいてきたものであろう。長年飼ってきた、家族同様の馬が死んで、その供養のために、建立したものと推測することができる。ただし、鵠沼は農耕に馬を使うことは極めて少ないようで、馬頭観音の建立が数少ないことも頷ける。

とくに江戸時代以降、さかんになった庶民に身近な観音様を信仰する心情をもつて、馬の霊を弔ったのも、農耕用として、また、乗り物としても人に役立った家畜である馬であるからであり、農家の人達にとって、馬が死ぬことはつらいことだと思う。生活の維持に欠かせない馬が死ぬことは、昨今のペットブームでの犬や猫のお墓づくりとは、全く違う切実なものがあつた。

なお、馬頭観音の日本での信仰は、平安時代の初期に始まったようであるが、鎌倉時代に、武士階級によつて広く信仰され、徳川時代以降になると、馬の守り本尊として、一般庶民にも広く信仰されるようになって、道端にも安置されるようになったとある。また、さきに書いたように、馬頭観音の像が明王と呼ばれるのは、ほかの観音と全く違い、その凄まじい忿怒の形相や赤色の肌などによるからで、悪を破砕して仏法を護る明王の一つと考えられていたといわれている。

：参考：

六観音信仰

〔NHKブックス「庶民のほとけ」より抜粋〕

奈良時代の頃から、一尊だけでも格別の人気と信仰を得てきた観音であるが、平安時代

になると、六種の観音を集成した六観音が新しい信仰形態を持つて登場してきた。

六観音とは、それに影響されて後に成立した六地藏と同様に、地獄以下の六道に輪廻して苦しむ生きとし生けるものを救済する目的で、六道それぞれに種類の異なる六体の観音菩薩を配したものである。

六観音信仰の直接の起源は、随代の中国で活躍した天台大師智顗（ちぎ）の書いた「摩訶止観」である。そこでは、六道それぞれの苦悩を救済する観音として六種の観音をあてている。

六道・・・・・・・・地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人、天。

摩訶止系六観音・・大慈、大悲、獅子無畏、大光普照、天人丈夫、大梵深遠。

真言宗六観音・・聖、千手、馬頭、十一面、准胝（母）、如意輪。

天台宗六観音・・聖、千手、馬頭、十一面、不空羼索、如意輪。

馬頭観音は、このように出現した六観音、七観音、三十三観音など数ある観音菩薩の中でも、例外ともいうべき恐ろしい姿をしたものである。この尊格も他の多くの変化観音と同様ヒンドゥー教の世界から要素を導入したことは明らかである。この原名は、ハヤグリーヴァで「馬の頭を持つもの」という意味である。インドの石像彫刻などを見るとハヤグリーヴァはおおむね観音の侍物ではなく、より昇格して観音の一種になったことは、我が国や中国に見られる馬頭観音の信仰、更にはチベット訳に存在する「馬頭観音の陀羅尼」などからもわかるものである。

なお、馬の首を持った尊が重視されたのは、教学的には、馬が牧草を飽くなく食べるように、諸々の悪い存在を食べ尽くすと説明しているが、文化史的に見れば、馬をトーテムとする種族の信仰から派生した可能性も否定できない。

馬頭観音は、その特異な性格から作例は余り多くないが、古いもので奈良の大安寺像などがある。観音菩薩を祀る四国三十三ヶ所霊場でも馬頭観音を本尊とするのは、僅かに第29番の丹後の松尾寺のみである。もともと仏たちの普及化が進んだ中世以後は馬頭観音は「馬」という特色を活かして畜類の守神や、旅行の守りぼとけとして新しい信仰を勝ち得ていたようである。最近では著名な競争馬の事故死に伴う葬儀を馬頭観音の寺で実施しているようである。



鵠沼の光と影 その2

鵠沼について

葉 山 峻

ここ鵠沼は、遊行寺・大庭丘陵方面から、片瀬海岸に流れそそぐ境川と、鵠沼海岸へ流れ出る引地川からの堆積地帯として広がり、随所に砂山があり、松林などが多く見られました。

藤沢が遊行寺の宿場町として栄えた一方、鵠沼は明治時代以降、保養地・海水浴場として別荘が建てられ、作家その他有名人が居住し開けていったのです。

私が生まれ育った頃は、引地川周辺を行動範囲として松露をとり、川魚をおつて大いに遊び回ったものでした。鵠沼小学校は、今と違いカタカナのコの字型に北が正面で、正門が南側にあった。正門の前まで麦畑で学校の周りに、きれいな小川が流れ、「ザリガニ」や「ドジョウ」などを取ったり、工作の時間に水車などをつくって、よくまわしたものです。昭和21年春、鵠沼小学校から、県立湘南中学（旧制）へ進学し、登校途中は麦畑やいも畑が広がっていました。今の烏森神社はうっそうとした森や池がありこわい所でした。烏森皇大神宮は、鵠沼の神社としてお祭りには、それぞれの町内できそいあつて山車が出たものです。私の住んでいた堀川では、いまの鵠沼海岸銀座通りのはずれまで引いて、町内を回ったものです。

現在に至っても、当時の緑とか魚を取って遊んだ川、お祭りなどが強く印象に残っております。私の田園風景には、「緑と太陽と潮風」の気候風土と、湘南の自然が心の中に入り、環境・健康・教育文化が良い町の条件だと思います。そういう意味あいにおいて、緑と潮風が薫る藤沢というまちを愛し、これを守っていかなくてはと思っています。

（以上は市長に取材した際の談話録音より抜粋、昭和53年11月。取材にあたった者は平松、吉野）

今年は昭和五十四年、西暦でいえば、1979年に当たりますが、俗に「お神明様」といわれている「皇大神宮」は、第五十三代淳和天皇の天長九年（832）に社殿が造立されていますから、御鎮座は更にどれほどさかのぼるべきか詳らかではありません。

この後、天喜三年（1055）元亨二年（1322）天正十二年（1585）と造営が重ねられています。御祭神に天照大御神をいただいております。第六十代醍醐天皇の延喜年間（10世紀初頭）には、奈良時代以来、現在の藤沢、西富、大鋸、鶴沼、辻堂などの各地区を総括して名づけられていた土甘郷の総社に列せられ、この時から後は、「相模国土甘郷総社神明宮」と称されることになります。また、長治元年（1104）に到って、時の領主鎌倉権五郎景政が所領の大庭荘を伊勢神宮の御厨として寄進してからは、東は俣野川（今の境川）から、西は寒川郷ざかいの小出川にいたる広大な「伊勢神領大庭御厨」の総鎮守とも定められた格式高い旧社で、御厨（みくりや）が成り立ってからは区域内にある村々里々に伊勢神宮を勧請して神明社とされるお社が次々にまつられるようになりました。また、寿永三年（1184）に到りますと、源平屋島の合戦に、源義経の部将那須与一宗高は扇的の一射で射あてて、天下に弓矢の誉れをあげたことは周知の通りです。東帰の途中、神恩報謝のため、当社にそのとき用いた弓と残りの矢その他を奉納しましたが、当宮の秘密の一部として現存しております。鎌倉に幕府ができると腰越が宿場として発達繁昌したように、東海道が現在よりずっと海近くを通っており、当宮も行きかいの多い街道沿いの旧社として尊ばれて来たわけです。また、この時代は砥上ヶ原、八松ヶ原、大庭野などは武士の獵場として賑わったといわれます。

現在は、神社境内に樹齢千年といわれる大樹が原生し、一時鳥の群棲したことがあるので、鳥森と称され、当宮を「鳥森の神明様」「鳥森神社」などと呼ぶ人もあります。明治初年に氏子各町が奉獻した人形山車は、総数九両あり、昭和五十二年十月には県の指定するところとなりました。祭典時の山車の参進の様子は、県内随一の盛儀とされています。

わがまち かむら 上村



上村（かむら）という名は、神明様の上（かみ）にある村ということでこの呼び名ができた。昔は、農業が主で今の中あたりは一面の田んぼで、おいしいお米がとれました。

宮崎、関根、小菅姓が多く、皆神明様の氏子であった。鵜沼の番地はこの地から一番、二番と続き、今日でもまだまだ田園風景が残り、引地川が流れ、南が別荘地区として発展していったのに反し、このあたりは、ようやく今日住宅として開発されてきました。

昔は十二から十八世帯位で、部落としては一番小さく、昭和十六年の国家総動員法が出た当時でも二十四世帯であった。お祭りで神明様の幟をたてるのは木杵でしたが、上村は穴を掘るのが大変だったので、石杵にした。そして、お隣の宮の前は、四十五から五十世帯位あったので、お祭りの時はいつも宮の前が、そのたびに手伝いの人を出してくれた。役員も三人位であったので、行事があるたびに大変でした。

昭和四十五年区画整理が行われ、急速に住宅化し、今日では、世帯も三〇四世帯になり役員も十六から十七人で一年間の行事を行っています。そして、上村の場合は、最近越して来た人達も、積極的に行事等に参加されています。「小学校は鵜沼小学校3分の2、本町小学校3分の1にわかれ、中学校は藤沢第一中学校へ通学しています。」この町内も町内会長を始めとして、老人会、婦人会の方々が集まって本当になごやかな町内です。特に二月一日の稲荷講は、町内全体の参加で盛大に行われます。

わがまち 石上

境川の西、鶴沼一帯の地を、むかし鎌倉時代には砥上（とがみ）が原といい
広い原野と砂丘がつづいた。

石上（いしがみ）の発祥はおよそ六百年前、源氏の残党が住みついたといわ
れ、守護の石上神社には、開発の祖鎌倉武士を祀ったと伝えられる。

明治中期の石上は、上に四軒、下に五軒しかなかった。神社と地蔵様は下の
部落にあったが、出水のたびに社殿が水に浸かった。明治三十五年江ノ電
が開通したとき、駅名は砥上と書いて、いしがみと読ませた。もともと石上は砥上と奥田
との合併で、駅は砥上にできた。

田は底なしといわれる深田で尻まで泥につかった。学校は鶴沼小学校で歩いて三十分。
境川にはカラス貝、シジミ貝、エビ、うなぎなどがいてバケツ一ぱいはわけなくとれた。

大正になって人家も次第にふえ、昭和初期には百軒近くなり、昭和九年には神社を会館
わきの現在地に遷（うつ）した。

戦後はベッタウンとして開発され、区画整理によって近代的な〔街〕に変わった。
腰までつかった深田のあとには、高層建築がそそり立ち、遠い砥上が原の面影などもはや
見ることはできない。わずかに砥上公園の名に昔を偲ぶだけである。（編集員取材）

わがまち 仲東



鶴沼の中心部にあたる仲東も、その昔は曲がりくねった引地川、桃畑
やうさぎの住む松林、家も次・三男が分家して建てた数える程の家が
ポーンポーンと建っていただけ。雨が降ると引地川はすぐ溢れだし一
拳に海をめがけて走り、あとは海まで真白になりました。普段は子ど
もの姿が見えないと、必ず川へ探しに行く良いあそび場でした。家々
は農業と漁業で暮らしをたて、子どもは7人か8人で貧乏でした。
遮るものが無いため三年に一度は”いなさ”（南風）が吹き荒れ、い
まあの”いなさ”が来ないのが嘘のようです。

今の高松、高瀬、宮崎、熊倉通りなどは、地主が自分の土地に道を
作り、自分の苗字をつけたもので、隣りの地主の道と繋いだため道は曲がりました。曲が

った理由はその他に、昔外敵を防ぐため、曲げてわかりにくくしたとも言われています。歩き易い所が自然に道になって、獣道ならぬ人間道もあり、三者入り乱れて鵠沼の道は、今でも細かく曲がりくねっています。そのため自動車のかけぬけない道筋は、とても静かです。子ども会ができてまだ二年目、今ひとつの壁に突き当たっています。それは仲東の子ども達は、鵠沼小に通学することになりますが、地区境近くでは、鵠洋小の子どももいるので、子ども会の行事が、学校の都合でまとめられないことです。色々と心を砕いて工夫しているのですがと、思案投首中なのです。

末尾になりましたが、仲東自治会は組織が入念にできていて、行事とか、活動が大へん活発です。ここの会館は藤沢で一番早くてせきた会館だそうで、その理由も十分納得のいくものでした。



本鵠沼の区域は、昔は荻田・清水・原・大東・中東・新田（しんでん）堀川などの部落が点在する純農村地帯でした。それが戦後の農地開放があってから急速に住宅がふえ、農業を営むものは激減していきました。ちなみに荻田は専業農家四十戸ぐらいの農村でしたが、今では専業農家は八戸だけです。当時、田は八部（はっぺ・鵠沼運動公園のあたり）だけで、ほかは一面の畑でした。桃畑に麦畑それに戦時中はさつまいも畑でした。

本鵠沼の特徴は道路が曲がりくねって、所々で二股に岐れます。その岐れ道には必ずといってよいほど石仏が祀られます。庚申・道祖神・馬頭観音などです。屋敷神としてお稲荷さんを祀る家もあります。

引地川の清水橋を渡ったところに稲荷社があります。戦後食糧事情が悪かった頃、若者達が藪の中に狐をみつけ悪戯半分に追い回し、捕まえて煮て食った。ところが関係した者の一族に不幸が続いたので、これは狐の祟りに違いないと関係者が発起人となり、現在地に稲荷社を建てて祀ったのです。

本鵠沼は現在、2673世帯で人口8834人にふくれあがっています。青年達の余暇はスポーツを楽しみ、老人会も盛んで、月一回の集まりがあります。時には婦人会や子ど

も会も仲間入りして、民謡や踊りの練習をします。ほかに、念仏講、温泉旅行もあって豊かな老後を楽しんでいます。

わがまち

『藤が谷』

藤が谷3丁目の江ノ電鵜沼駅前に小高い丘があって、賀来神社がまつられています。境内には社務所兼町内会館があって、東部クラブといます。むかしは鵜沼東部町内会といったからです。クラブの集会室は午後3時からソロバン教室になります。

賀来神社は豊後（大分県）府内の藩主大給（おぎゅう）家の江戸屋敷に祭られていたのを伊東将行が守護神としてここに遷座したものです。例祭は9月1日から7日間で、1日はみこし三基と山車の飾りつけをします。2日はこどもみこしをかついで町内を回ります。昭和初期には境内に芝居がかかりました。

正月は14日にお飾りを集め、書き初めと一しょに境内で燃やし、ダンゴ焼きをしました。今後は行事を復活したり、例会を8月にして夏休みにやりたいと考えています。

藤が谷は江ノ電によって開かれ、江ノ電と共に発展してきました。その江ノ電も去年（昭和54年）は77周年を迎え一層愛され親しまれています。ちなみに鵜沼駅一日の乗降客は4千人、大半が通勤通学客です。今年は境川の鉄橋が2.5メートル高くなると同時に、鵜沼駅ホームも大幅に改築されるそうです。

お話を伺って外にでると、ソロバンにきた子ども達が境内の鵜沼海岸開発記念碑の下でメンコ遊びをしていました。ここは藤が谷の人達の心のふる里だと思いました。

（編集員取材）

わがまち
『柳小路』

——— どこからか三味線の音が聞こえてきそうな粋な名前の町、柳小路のみなさんをお訪ねしました。 ———

柳小路の名は、長妻さんの家のまわりにあった柳の木が目印となり、町の名前となりました。このあたりは、境川が拡がって、川か沼かわからない地形でした。大正11年にはじめて別荘を建てて住みつけたのが、中根さんはじめ3軒でした。翌大正12年の震災では、津波は来なかったが、別荘はつぶれ、けが人も出ました。

この近くには、百両山のような松の繁った大きな砂山や、小さな砂山がいくもあって、松露や初茸がたくさん採れました。海水浴はこの砂山をこえ、鵠沼海岸まで歩いたものです。

境川では鮎が釣れ、鰻が捕れました。長妻さんの家のそばには、川が流れ沼があり、釣りもできました。付近一帯は地盤が低く境川の土手が切れるたびに、床下浸水でした。

戦時中は、空襲で家を焼かれた人や疎開などで転居者がふえ、戦後は江ノ電が貸家を建てるなど、家もふえ店もできました。

町が現在の形に落ちついたのは、昭和30年の頃です。今では、柳小路だけで五百世帯になり、気軽に話し合いのできる明るい町作りに励んでいます。（編集員取材）



鎌倉時代、西行がこのあたりを通ったときは、柴松と葛が生い茂り、鹿が鳴いたといいます。ここが開発されたのは明治20年ですが、そのころもやはり低い松の生えた一面の砂原で、不毛の地とされていました。そこへ道路をつけ、松を植えなどしてまず鵠沼館（こうしょうかん）、対江館、東屋旅館などができ、知名士や文人がさかんに来遊しました。

芥川龍之介が東屋の貸家に滞在して作品を書いたことは有名ですが、文豪徳富蘆花をはじめ志賀直哉、武者小路実篤、子母沢寛、吉屋信子等々、多くの作家芸術家が来遊または居住して作品を残しました。岸田劉生が麗子像を画いたのもこのまちです。

これらの文芸家たちがこのまちに文化の種をまき、それがいますくすくと育っているのです。ここは気候や風景に恵まれているばかりでなく、優れた文芸家の心、文化の土地柄にふれたくて移り住む人達も多いのです。鵠沼銀座は、昭和4年小田急開通と共にできた商店街で、当時は十店ぐらいでしたが、今では二百余店が軒を連ねる発展ぶりです。

ここは、明治の昔から湘南随一の海水浴場として賑わい、今では東洋のマイアミと呼ばれる盛況です。最近サーフィンのメッカとなり、四季を通じてサーフィン族の絶えることがありません。

以上の「わが町シリーズ」は、昭和54年7月から、昭和56年1月迄の間に、当時の藤沢市鵠沼地区広報委員会の発行によるもので、取材を依頼された各町内会では責任をもって、その要求に応じて下さったものなのです。

当時この編集に関係していた吉田興一記す。

鵠沼の光と影 その3

郷土史あれこれ

藤が谷在住

三 輪 梅 三 郎

江ノ電「くげぬま」駅前の賀来（かく）神社境内に、大きな石碑があるのをご存じですか。これは大正9年12月、当時の藤沢町長金子角之助氏を筆頭に九名の方々が発起人となって建立されたものです。

頭山 満氏題字、牧野随吉氏が撰文し、その自筆になる碑文によれば、現在の快適な鵠沼の住宅地域は、正に伊東将行氏こそこの開発最初の鋤を入れた人と記されています。

明治19年、偶々この鵠沼海岸東南の地域が別荘地として恰好の処であることに着目し翌20年、土地の人、三觜直吉氏と「武想クラブ」を創設し、この開発に着手されたのであります。まず、東京本郷根津の大給（おぎゅう）家邸内に在った賀来神社を地域の郷社として、現在の処に遷座奉賛し、明治25年開発実施の據点として東屋旅館を建て、伊東氏は日夜ここを根城にして、京浜の実業家、豪商に呼びかけ、反歩（3000坪＝約1ヘクタール）を単位に、一人に数千坪を売却するなど努力されたのです。

また、居住者のために、土木建築植木職、なお、生活必需品、日用品など供給するための諸職、商品は、主として東屋に関係のある人達に適当地を譲り、その業の育成援助まで行きとどいた街造りに尽瘁され、大正9年、伊東氏没後も、この事業は多くの方々に引き継がれ次第に発展してまいりました。

大正12年関東大地震の災害を蒙り、その復興に際し、街の様相は著しく変貌しましたが、往時を忍ぶ幾多の遺跡は、今日も随所に見ることができます。

鵠沼の南部と東部との境は、そこを流れて境川に合流する用水路であったように思われます。江ノ電「くげぬま」駅より西南方向の海岸に到る道路の中段にあった藤ヶ谷橋（今はその痕跡もありませんが）はこの用水路を跨いだ石の橋であります。

東部の境は境川までで、北は「柳小路」駅の北、片瀬町の飛び地で、そこは「川袋」と言われ、現在の鵠沼女子高校の一部を含む大きな蓮池があり、境川、用水路、深田、池や

沼が混在し、片瀬町が藤沢市に編入される前は、鵠沼とは言えなかったでしょう。

鵠沼海岸西部は伊東氏の別荘地としての開発区域ではありません。この地域については後で述べますが、本鵠沼を中心とした付近一帯の地域は、農村地帯で、国鉄（昭和55年当時）東海道線の北、湘南高校のさらに北西にある引地橋あたりが鵠沼一番地です。鵠沼神明から鵠沼小学校、藤沢警察署（名称は当時のもの）付近も農村地帯として本鵠沼付近と一体になっていました。葉山市長さんのお住居のある付近から、高根地区、引地川の稲荷橋付近より、鵠沼海岸南部までは、昔、鵠沼西海岸と呼称し、今この地区を鵠沼海岸西部といっています。

この鵠沼地域一帯のベット・タウンとしての市街化は、はるか昔に遡り、まず最初が海岸南部の伊東氏経営の「東屋」旅館付近、第二番が明治35年9月1日の江ノ電「藤沢」「片瀬江の島」間の運転開始、第三番が関東大震災（大正12年9月）後の別荘の本居住化、第四番が昭和4年4月1日の小田急「江ノ島線」の運転開始、第五番が昭和20年の終戦後の猛烈な住居の欲求であって、それが開発の遅れた西部地区から本鵠沼の農村地帯に拡大し、加えて、小田急「江ノ島線」が昭和18年11月、複線が金属回収で単線になり、一時運転休止していましたが、23年9月運転開始、（私の記憶では、21年7月には乗車した経験がある。吉田）翌24年4月複線に戻り、この交通の増強が住宅建設に拍車を掛けたのであります。これは宅地の入手が先決条件ですから、かつて伊東氏の開発では一人で最小千坪から三千坪、五千坪と分譲された宅地は、次は百坪から三百坪、五百坪千坪となり、その次は一人が四十坪から六十坪、広い方でも百五十坪位が標準的なところとなっていました。

この項おわり

記憶の鵠沼海岸（震災前）

高 木 和 男

私が鵠沼海岸へ来るようになったのは、大正7年からで、鈴木屋の角を北に入って100メートルも行った左側であった。その頃は夏だけ来ていた。現在のところへ来たのは大正9年からで、その後は、私はからだが弱かったため、今の家から湘南中学に通ってその

まま現在に至っている。

今の銀座通りは、当時はまだ家よりも松が多いという感じで、思い出すままに西側から述べて行くことにする。鵜沼の本村から来た道路は、東海道からわかれて、上村、清水、宿庭、刈田、原、堀川と南に下って堀川から直接海岸へ出る道路と東へ海岸へ来る道路に分かれて、浅場田んぼ（今の熊沢屋支店からセブンイレブンまで）の北側を通っていてこれが昔からの道路で、このおわりのあたりの北側に蘆花「思い出の記」に出てくる鵜沼館（こうしょうかん）という旅館があったという。東屋ができる前の話である。

鵜沼海岸の碁盤目の開発は、伊東将行らによつて、行われたものであるが、この開発でできた道路と堀川からきた村道とは、今の公民館の通りでくいちがっていた。これは大震災の後にまっすぐになおされたが、村道の北側の道路にそったところには、公有地が残ったわけで、それが今の新郵便局と隣のいまい屋の前の空き地となっていると考えられる。

さて、藤沢駅から、鵜沼海岸へ江ノ電もつかわずに来る道は、駅から南仲通りへ抜けて斜め道（オデオンの角）を大路切（小田急ガードのところ）へ出て、大東部落から、刈田（今の警察のあたり）へ出て、堀川からこの海岸のくいちがいへ出たものである。

三井家が来ていた頃は、三井さんのおいでとなると、鵜沼中の車夫は大張りきりで、藤沢からこの道を、何台もの車を連ねて別荘入りしたもののようである。私の知っているのは、江ノ電開通の後であるが、その後、車夫が私に、三井さんのおいでときは華やかだったと話してくれた。岸田劉生も、台風で江ノ電が不通になったとき、この道を人力車で走ったと鵜沼日記に書いている。

ところで、このくいちがいのところに安場という人足口入業の大きな店があって、男が大ぜいいて気味が悪いような薄暗い店があった。そこから今の銀座通りを東へくると、大正10年頃には、島野八百力のところに斉藤百貨店があって、生活用品なんでも売っていた。斉藤百貨店は、大正12年の夏には道路の北側、今の宝屋のところに大きく新築した。北側は今の沢肉店のところまで松山で、かなり高い松が生えていた。南側には、大正10年の頃には床春が移って来ていたと思う。また、今の月山堂から西側今の鵜沼薬局のあたりまでは、秋津という駄菓子屋があった。（のだやから月山堂ふきんまで）おかみさんが駄菓子売って、主人は人力車をひいていた。鵜沼海岸の店もち、家持ちの土地の人た

ちは、在から出て来て、はじめ賃仕事をして稼ぎ、金を溜めて人力車の株を買って車夫となり、同時にどこかの別荘番の口をさがして家を獲得し、またおかみさんをもらった人たちが多く、車夫になったことは出世したことであつたのである。このような経路をとらないで店をもつたのは鵠沼饅頭の鵠沼庵（中野）や、有田だけだつたろうと思う。秋津の隣り、今の関根スレート葺きのところは空き地であつたと思う。その隣、今の文房具屋のところが魚岩という魚屋で、その隣は、今の浜野牛乳店があつたように思う。番場は私の記憶にははっきりしないが、震災前からあつたという。もっとも今は、堀川にいる長男がやっていた。海岸へ行く道を海の方へ辿ると、関根貞造の家があつた。古い人で、世話好きで車夫もやっていたようだが、在から出て来た人たちは、この人を頼って来たようで、人力の株の世話、別荘番、女房の世話までしていたようで、貞さん貞さんと、したわれていた。いろいろ古いことを知っているというので、聞きに行こうと思いつつひまがなくて聞くことができなかった。残念だった。

鵠沼庵の東隣りの今のマリヤのところが、人力車の車庫で、ここに車夫が数人づつ客待ちしていた。この車庫の隣、今の江戸屋のところが中屋の門であつた。大きな両開きで、屋根がついていた。今の魚^人林のところは貸家であつて草葺きの家があつた。それから東側は中屋の持地所だが、大正7・8年の頃は、空いていて、町内クラブ（町の集会所）が奥の方にあつたように思う。。伊東家と中屋の境の小路から海寄り、東屋の持地所で、小路と銀座通りの間の土地はすべて中屋の地所であつた。中屋は田中家で（今の鵠生園）、日露戦争の当時は傷病兵の保養所になっていたという。私の知っている大正7年から震災までの間は、旅館をして、東屋のように高級ではなく、庶民的な旅館として避暑客などを入れていた。（未完）

大庭御厨と鵠沼

伊 藤 昌

天養二年（1145）当時鎌倉にあつた源義朝は、突然、鎌倉・高座両郡の境である俣野川（現境川）を越え、郡境に近い大庭御厨内鵠沼郷に不法に侵入し来り、「鵠沼」は鎌

倉郡内と称して数々の乱行を働いた。と記録されている。

大庭御厨とは「吾妻鏡」に、鎌倉権五郎景正、永久五年（1171）十月三日私領相模国大庭御厨を、神宮に永代寄進したとあり、これが歴史上に現れた最初である。

当時、中央の権門勢家・地方豪族が、所領護持に血道をあげ、微力の集団が生き残る手段としては、強大な宗教勢力の庇護の中に入るのが一番安全であった。これにより、現在の藤沢は、曲がりなりにも他からの侵略を防ぐことができた。ということができる。当時の大庭御厨は、東は大船の玉縄城跡の付近及び境川に、南は鵠沼、辻堂の海岸線に、西は当時神領といった寒川神領に、北は大庭野北辺に囲まれた区域をさす。といわれている倭名抄（わなしょう）にいう高座郡十二郷のうち、大庭郷、土甘郷（藤沢、鵠沼を含む）堤郷の一部、河合郷の大部分である。

当時の鵠沼とは、いまの本鵠沼で、鵠沼神明社を中心とした地域と考えられる。横須賀、八部、藤原、高山等の遺跡があり、砥上ヶ原といわれた鵠沼も、幾星霜を経て現在の高級住宅地になっているわけである。

おわり

（注）（その1）の先頭と（その2）の末尾に記したとおり、かつて、地域のコミュニケーションを目的とした、ミニコミ紙に掲載されたものを、転載させていただきました。今日まで約10年が経過していますので、執筆者の方々にはお断りしてありません。どうか郷土の記録として残すため、この紙上でお礼を申し上げることでご了承ください。

「鵠沼」平成2年11月13日56号

平成2年 11月13日発行

鵠沼公民館祭「馬頭観世音と馬
のルーツをたづねて」写真展

鵠沼の光と影その2・3

発行所 鵠沼公民館

藤沢市鵠沼海岸2-10-34

電話33-2001

編集鵠沼を語る会代表塩沢 務

藤沢市鵠沼海岸3-12-33

電話36-7876